老若男女

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

１、なぜに 貴様は生きてるの　死ぬのは簡単と 呟いてるよね
そんな答えの 一粒に　生きる喜び 含まれていた

あなたは何にも言わないで 生きれる道探し
私は言い訳ばかりして　苦しんでいる

最高だった「だった」 そういう言葉
最高すぎた「すぎた」 あの時のセリフ

今日も姿を見つけた時　私の心がホッとした

２、あいつ『人生の落伍者』と言う　そいつ『最悪の人間』と言う
奴ら楽しいこと 言うために　人を馬鹿にして 無理やり笑って

そういう涙の最期には　何も残らない
途中で気がつく人だけが　優しく囁く

人生は困難「困難」 それが面白い
そんな風に思えりゃ「思えりゃ」 それが幸せと

２人の心は同じころ　全てがわびしく見えていた

３、テレビにラジオ、レコーダー　自分にとっては当たり前だけど

贅沢だった「だった」 当たり前すぎて
贅沢すぎた「すぎた」 困難を極め

老若男女よ ただ生きろ　疲れたものからすぐ眠れ
老若男女よ ただ生きろ　疲れたものからすぐ眠れ

君を離さない

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

１、風が涼しい駅の前で あなたのことを 待ち続けてた
約束時間の５分前に かわいい姿が 遠くに見えた
優しい言葉で話しかけた 最初の場面を 思い出してる
君は少し顔を赤らめ 可愛い笑顔で 静かに答えた

あの頃から 恋は全て 何も変わってない
変わらなくていい このままで 素直のままで

ずっと愛してる「あの日から」 僕は愛しすぎている
また会えることでさえも 最高のことなんだ
夢を永遠に「いつまでも」 ２人生き続けるから
止めないでくれよ お願い そっと 恋ごころ

２、月も眠るそんな時間 夜景を見上げて 楽しく歩いた
言葉も途切れた別れどきに 思わず心に 何かがよぎった

振り向いた時 空間の中　夢を見つめてる
なんにも見えない いつの間にか 近寄ってる

何も離さない「Oh－ラブリ～」 すべて離したくはない
このまま隣で寝よう 消えた月のよう

抱きしめていたい「Uh－」　もしも 時が止まるのなら
12 話のドラマのよう 今日が最終回

君はいないけれど

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

１、無邪気な風をすり抜けて 果てしなく走る
ふかしたエンジン音さえ 冴えていなかった
キザな話に笑ってた 日々を思い出す
大人になった愛は今 どう変わってるの

Ah－ いつもそうさ　Ah－ なんかする前に
Uh－

髪の毛を気にしていたね
Ah－ そんなことが　Uh－ いつも心を
動かしていたよ

君は いないけれど　僕は すぐに謝りたいよ
それだけでいいから　離れていても
かまわないから

2、ミラー越しの女の子も タワーの光も
果てしない愛の鼓動も 惨（みじ）めに感じた

Ah－ そんなことを Ah－ 別に何も
Uh－
気にしていなかったけど
Ah－ だけど言っていた　Uh－ 楽しいものは
どこにもなかった

最後 見続けてくれた 優しい顔を 想い出してる
結局 たった一人で 過去をみていた
孤独な男で

君はいないけれど 僕は君に謝りたいよ
それだけでいいから 離れていても
かまわないから

最後 見続けてくれた 優しい顔を 想い出してる
結局 たった一人で 過去をみていた
孤独な男で

結局、たった一人で 過去を見ていた
孤独な男…

君の声

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

君がもしも 飛べなくなれば 僕が迎えに行くから…

1、あいつ達は 大人になった 昔のように笑わない
自分だけが 取り残された それでも別にいいけど
戻った校舎 懐かしい匂い あの頃は良かった
そんなふうに 想った時に 変わったんだと気づいた

人は知らぬうちに 心変わってゆく
あの頃はもう 2 度と 戻ってはこないのか…

2、白い声は 渚に揺られ やがて空へと離れて
甘い声は 渚に運ばれ 遠い星のどこかへ
君はいない 誰もいない 僕はいない 傍にいない
自分だけが 取り残された それでも別にいいけど

いつも離れ離れ ずっと離れ離れ
この冬が終わったら もうすべて忘れるよ

愛はどんな風に 夢を誘ってたの
雪列車 花一つ　手に持って会いにゆくよ…

Grand forever love you forever 叶わないなら それでいい

だけど 君がもしも 飛べなくなれば 僕が迎えに行くから…

奇跡 LOVE

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

1、絶え間なく話しすぎて　今ではなんにも
言葉見つからず　そっと話すの待って
さわやかな瞬間（とき）のなかで　二人は出会って
ずっと見つめ合い　永久に抱き合って

「愛してる？」て聴かれ　「愛してる」って言った

君となら　やっていけると　ずっと思っていた
話などなくても

2、自分から愛すること　ちょっと忘れてた
いつも愛される　そればかり思って

会うけどまた離れて　それの繰り返し
一人の哀しさを　ちゃんと知ってるだろう？

「傍にいろよ」　「どこにも行くな」

やっと会えた　そんな奇跡が　心つないでいた
それも奇跡だろう

君となら　やっていけると　ずっと思っていた
言葉などなくても
言葉などなくても
言葉なんてなくても…

ポプラ～いつもの公園（ばしょ）～

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

１、そしてここで結局　一人たたずんでいた
暖かい木漏れ日が　心なぐさめる
少しさみしくなったら　きみをまた想い出す
幼くてかわいげな　甘いあの笑顔

あれは片想い　君はいつの日も
僕に気づいたって　見てみぬふり

満月さえも　見えなくなって
誰も傍にいない
そんな真夜中　暗がりをただ
ぼんやりと一人歩いてた
探してたのは　遠くに消えた
ポプラ　Ah－

２、やり場もなく歩いて　着いたのはこの場所で
なつかしいブランコは　何も変わらない
理由（わけ）は知らないけれど　ここでずっと泣いていた
うつむいて零（こぼ）してた　枯れたあの涙

かける言葉さえ　見つからないまま
泣き止むまではずっと　立ち止まって

涙が積もる　この愛だけは
ゆっくりと時が流れ
記憶に残る　日々を忘れて
なんとなく今は眠ってた
振り向いたのは　美しく咲く
ポプラ　Ah－

鳴り響いた鼓動は　メトロノームのように
こみあげてく力は　全て支配する

状況判断できなくなって　何か傍で笑ってて
時間もなくて愛しかなくて　暗闇に２人眠ってた

満月さえも　見えなくなって
誰も傍にいない
そんな真夜中　暗がりをただ
ぼんやりと 一人歩いてた
探してたのは　遠くに消えた
ポプラ　Ah－

Gentleman

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

１、皮を剥げば人間なんて　顔も同じ細い奴ら　飾り同様　ただの骨野郎
だけど僕は恋をしてた　君に愛を止めなかった　きっと傷が　必要な女（ひと）

想いは全てを駄目にして　願いは必ず夢に出て
形にならないものならば　ワタシは何でも切り捨てる

彼の前じゃ Gentleman　常に選ばれある Gentleman
友とならば　ただの男に戻れるのに
愛の angel　涙　見失わないでくれ
愛情の世界　すべて思い通りゆくなら…

２、時は涙、見えないのか？　星は心、いらないのか？　傍にいつもいるというのに…

計り知れない熱い身体　人の色で染まってほしい
心の優しい瞳から　ちゃんと赦してくれてるかも

それは続いてゆく　例え日常に飽きても
飽き足りない　ワインきっと飲んでいるから
永遠に人は　日々の中で愛し続けた
心情の都会　君を掴むために 笑えば…

激しく揺れる気持ちの中　激しい滝を伝えたくて
それでは駄目だと言うのなら　ワタシはアナタのために死ぬ

ああ 白いファントムよ　そんなことを邪魔しないで
感情の世界　永遠に愛してくれ　お願い…

ロウソク

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

１、懐かしい　あの女（ひと）が　夢の中　現れて
あの頃と　変わらない　微笑みで　近づいてくる
目が覚めれば　それは嘘になって　君も今は　もう赤の他人
だけど綺麗だった　ソレが見えないのは　なんか惜しい感じ

速い日々　仕事にも　ついてけず　腐る毎日
落ち着けと　思うほど　焦りだす　俺の気持ち
ああ 静かな場所が　欲しいだけさ　孤独という　言葉でいいか
それが足りないから　今がひどく映る　全てが嫌になる　OH－

立ち上がった時が蒼いように　全てが苦しい地獄の楽園
湧き上がった街の中で一人　歪な哀しみに浸っている

２、泣き叫ぶ　少年が　人混みに　流されてた
誰一人　少年を　救い出す　奴はいない
そう 誰もが　すべて自分なのさ　若い者をけなす奴らも
何が答えなのか　ちゃんと答えてくれ　誰もがクズになる　OH－

信じちゃいけない社会の嘘　あなたが見ているのは下劣なジオラマ
大空の奥の中で一人　自分の感情を叫んでいる

ロウソクが消えた　誰か消えた
優しく吹かれても　消えてゆく Oh－my heart

死んではいけない今の街で　生きゆく情熱は　何を描く

次の時代

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

１、ある帰り　僕は制服姿で　いつものようにバスを待ち
やがてバスが来て　すぐに乗った
お金を払い　そしていつものように　一番後ろの長い席に　向かい歩いた
そうしたら　超ダラしない格好で
髪をブラシで直してる　一人の女子校生がいた
それはよくあることだと思って　あまり気にせず逆側の端の　席に座って外を眺めた
そして　バスは走り出して　駅から駅へと到着して
そこでその女性は降りた
そうしたら　前の席のおじいさん　隣のおばあさんに向けて　話しだした

「ダラしないね」とか　「信じられないよ」とか　「最低だよ」だとか

Ah－　今　なんだか気持ちが動かされた　僕もあいつに一言言いたかっただけに
でも　「今の」　日本人はか弱いもので　叱るとか気軽に話すとかできなくなってる
Ah－　チンケな悲しみ　Ah－　惨（みじ）めな光景
直すのは　常識 だけでいい...

２、夜になり　僕はテレビをつけて　チャンネル飛ばしてふと見たら
ニュースで　特集がやってた
見ていたら　夜も遅いというのに　花火をバンバン打ち上げる　若者達がいるらしい
近所の人は　かなり腹を立てて　映してるカメラを前にして　怒り放った

「いい加減にしろ」とか　「注意してもムダ」とか　「常識がない」とか

Ah－　また　なんだか気持ちが動かされた
やがて　奴らも大人になってゆくというのに
でも　「こんな」　ブラウン管の前から吠えても
所詮は素人　言い分なんて届きやしない
Ah－　無残な呟き　Ah－　意味のない愚痴の嵐
変えるのは　不可能でもいい...

Ah－　何故　こんな地球玉（ほしだま）に生まれてきたのか？
何故　隣の星にしてくれなかったのか？
でも　「だけど」　どちらにしても言えることは
宇宙という頑丈な檻からは　逃げれはしない
Ah－　苛立つこの時代　Ah－　訪れる我が時代
聞いてくれ　偉そうな　若人よ
頼む　知ってくれ　常識のない　泣き虫よ…

恐怖の飢絶（うた）～ドラキュラ編～

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

１、恐怖の飢絶（うた）を　飢絶（うた）ってあげる
あなたのために　飢絶（うた）ってあげる
何が幸せ　何が欲しいか
私のために　話しておくれ

Ah- あなたが見たもの　それら全て
優しい言葉に　すり替えてあげる
引き止めたドラキュラは　憎い女を皆殺し
空を見て　手を振ったまま　強く　激しく　燃える　Oh－

今、奴の心は夜空を超えて
果てしなく「果てしなく」　消えてゆき「消えてゆき」
０mm（ミリ）の星になる
今　奴の名前は伝説となって
永遠に「永遠に」　永久に「永久に」
夜にだけ話される…

２、すりむいた傷　破ってみたら
赤い血液　滴（したた）り落ちて
傷をよく見ると　肉がグチョグチョ
さらによく見ると　血管が喰われている

Ah－ 男は恐怖で　意識が消え
ほんの２秒で　死体へと変わる

誰一人訪れぬ　闇のどこかの城の中
白い目で腐ったまま　深く眠り続ける　Oh－

その赤い死体は　万年を過ぎて
独りでに「独りでに」　動き出し「動き出し」
円（まる）い月へ歩み出す
そして奴の体は　光に染まり
この世では「この世では」　いつまでも「いつまでも」
見えない物に変わる
ドラキュラは「ドラキュラは」　今日の日も「今日の日も」
月の下で眠ってる
目が覚めた「目が覚めた」　少年は
嘘の話しだったと笑う…

逃亡者～夢を切り裂いて逃げる影～

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

１、私の親父 or あいつの親父　今、語り合って悟りあってタンタラタンタンタン
袖をまくり、もうフニャフニャな目で　また　麻雀やって酒を飲んで
タンタラタンタンタントタントタン
右を見れば美しく彩る若い珊瑚の雛模様
左を見れば人混みの向こうに青い海と青い空
前を見れば私の故郷さヤンヤヤヤンヤヤヤヤヤヤヤヤ

親父の息子　今　犯罪者とは　まだ知らないまま
わからぬままタンタラタンタンタン
昼間のニュース　犯罪者は息子　でもわからずに　酒に夢中で
タンタラタンタンタントタントタン
酔っ払っても忘れることはない　息子の笑顔と優しさを
自慢の息子　それが生きがい　でも　真実それは裏返し
やがて伝わる　悪魔の時間までヤンヤヤヤンヤヤヤヤヤヤヤヤ

夢を切り裂いて逃げる影は　朝から晩まで人目を気にして裏道だけ
ただ　あっちにこっちにそっちにどっちに逃げる影は　なんとも苦しい日々だらけ
それはさておき夢で笑う　私の moment あなたの moment 誰かの moment
また 山地を 平地を 盆地を 団地を 駆け回る　楽なるその日を待ち焦がれ…

２、道路の端で　そこ誰も居ぬ場所　今　座り込んで倒れ込んでタンタラタンタンタン
茶色の袋　パンを取り出して　今　かじりながら夜空見上げ
タンタラタンタンタントタントタン

この生活で見つけた素晴らしい　生きるという意味　その全て
犯罪者とは言われるが本当は　心の素直な偉い奴
さあ逃げろ　捕まるな　頑張れ　最後の夜に着くまでは

夢を切り裂いて逃げる影は　朝から晩まで人目を気にして裏道だけ
ただ　あっちにこっちにそっちにどっちに逃げる影は　なんとも苦しい日々だらけ
それはさておき夢で笑う　私の moment　あなたの moment 誰かの moment
また　山地を 平地を 盆地を 団地を 駆け回る　楽なるその日を待ち焦がれ…

ララランララララララララララ
私の moment あなたの moment 誰かの moment
ララランララララララララララ
楽なるその日を待ち焦がれ…
待ち焦がれ…

人生 HAHAHA

作詞　岡本　悠／作曲　岡本　悠

１、何ひとつ変わらない　毎日の景色が　さんざん空しく映る

２つ目の軽い下り　理由（わけ）もなく突然に　自転車のスピード上げた

僕はまだ　何のために　生きているか　わからなくて

通りすぎた場所は　笑い声がつのり　騒がしい街の中で

また笑ってはみるけど　本当の気持ちは　ちっとも笑っちゃいない

明日もまた　同じように　何か抱えながら　生きているのか

何も変わらない１日をまた過ごす　ああ　それで見つけ出したもの

別に面白いことなんかなかろうと　飽きようととにかく生きよう…

２、言葉にできぬほど　哀しい時もあった　涙した夜もあった

想い出はサンセット　思い出は揺れて　温かいモノになるけど

全てグラディネーション　過去は捨てて　未来に向かい今日を　生きてゆくから

こんなひび割れた　傷跡はもう忘れ　立ち上がり　心を開こう

別にこれという　夢なんかなかろうと　今を見て　ひとまず歩こう…